

1. 課題背景

浜松国際交流協会では、外国人学習支援センター（以下、「U-ToC」）にて、浜松版生活日本語コース（以下、「生活日本語コース」）を開講している。当該コースは、ゼロから B1 レベルまでを目指し、年間 600 時間の授業を提供するものである。4 月に開講するクラスを「さくらクラス」、10 月に開講するクラスを「もみじクラス」としている。

生活日本語コース開始直後、学習者が連日欠席し、結果的にキャンセルするという現象（本稿では、「フェードアウト」という。）が見られる。学習者は、浜松に住む生活者であり、社会の一員でもあるという考えのもと、コーディネーターとしては継続的に日本語能力を身に付けてほしいと考えている。そこで、前回の中間報告では、主に学習者がコースをフェードアウトしてしまう要因を資料から、教室へ復帰する際、教室内で親しい学習者ができていないことに対する不安やコース序盤に欠席が続いたことによる学習不安が、フェードアウトの要因ではないかと考えた。加えて、今年度のクラスでは、フェードアウトがほとんど見られなかったことから、自分と同じ言語を話したり、同じ文化圏に属していたりする先輩学習者の存在が、フェードアウトを止める要素になっているのではないかと考えた。そこで、実践活動計画では、学習者が「教室内で親しい学習者ができていないことに対する不安」と「コース序盤に欠席が続いたことによる学習不安」の解消を強化するという方針を立てた。次節では、実際に行った実践活動について記述する。

2. 実践活動

「教室内で親しい学習者ができていないことに対する不安」と「コース序盤に欠席が続いたことによる学習不安」の解消に向け、まずは先輩学習者との接点を増やそうと考えた。授業では、12 時 20 分から 12 時 40 分までの 20 分間、お昼休憩が設けられており、学習者の中には、教室でご飯を食べる者もいれば、教室外にある、机と椅子が配置された交流スペースでご飯を食べる者もいる。この、先輩学習者と話せる機会がある、交流スペースでの昼食を活かすことを考えた。当然のことながら、先輩学習者と後輩学習者の中には同じ言語を話す者もいれば、違う言語を話す者もいる。違う言語を話す者同士の共通語は、日本語か英語となることが多いが、なかなか不安の払拭までにはつながらない。そこでお昼休憩の時間に、自らが彼らの間に入り、仲介役を担った。しかし、この活動は、俯瞰的に見るとうまく機能できていなかったと言える。なぜなら、必ず先輩学習者と後輩学習者が交流スペースに来るという保証がなかったり、また交流スペースに来たとしてもそれが全員でなかったりするためである。加えて、コーディネーターもこの時間は、業務における休憩時間であり、時間の調整が難しく、交流スペースでの仲介役を担えた日は、まばらであったためである。

一方で、現在の後輩学習者のクラス「もみじクラス」では、フェードアウトした学習者が 2025 年 12 月時点で一人もいなかった。（「もみじクラス」は 10 月中旬から開講している。）これは、実践の効果ではなく、別の理由がこのような結果を生んでいるのではないかと考えた。さらに、先輩学習者

と後輩学習者を見ていると、一部の学習者しか、あまり接点を持っていないようであった。そこで、後輩学習者は、不安の払拭が誰によって行われているのかを知るべく、アンケートを実施した。

アンケートは、「もみじクラス」の学習者を対象に、Googleフォームを用いて、選択式で実施した。設問と選択肢は図1の通りである。

設問②の選択肢「サポートしてくれる先生」とは、学習者を授業中に補助してくれる方を指しており、通常、1日の授業で1名の補助者が付く。また、「インターンの人」とは、昨年度 U-ToC で生活日本語コースを修了した学習者が、補助者のサポートや学習者のサポートを行っている

① U-ToCの中で、気軽に相談できる人は、いますか。

いる

いない

② U-ToCの中で、気軽に相談できる人は、誰ですか。(複数回答可)

※①の設問にて「いる」を選択した場合の質問

クラスメート

クラスの先生

サポートしてくれる先生

インターンの人

さくらクラスの人

その他

図1

る。先輩学習者のクラス「さくらクラス」には1名が、「もみじクラス」には2名が、授業に入っている。

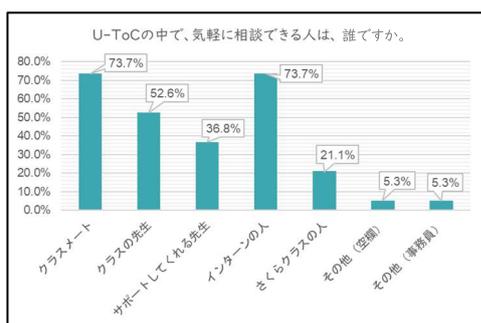


図2

アンケートは、19名の回答があった。①の設問では、19名全員が、「いる」と回答した。次の②の設問では、73.7%が「クラスメート」「インターンの人」、52.6%が「クラスの先生」、36.8%が「サポートしてくれる先生」、21.1%が「さくらクラスの人」、5.3%が「その他」であった(図2)。

この結果から、学習者が気軽に相談できる相手としているのは、クラスメートとインターンの人であり、彼らが学習者の不安を払拭している可能性が示された。

3. まとめと今後の展望

学習者がフェードアウトする要因に「教室内で親しい学習者ができていないことに対する不安」や「コース序盤に欠席が続いたことによる学習不安」があるのではないかと考えた。そこで、先輩学習者との接点を増やそうと計画を立てたが、学習者の様子を見ていると、あまり先輩学習者との絡みは見られなかった上に、フェードアウトも見られなかった。そこでアンケートを実施した結果、学習者は、クラスメートやインターンの人学習者の不安払拭に貢献している可能性が示された。

今回の実践活動を通じて、U-ToC内に学習者が気軽にできる相談相手が誰かということを示すことができた。加えてインターンの人教室にどう貢献しているのかもデータをもとに示すことができた。今後の展望としては、学習者誰もが安心して、「次もまた行きたい」と思えるような教室運営を考えながら、インターンの人教室が今後も継続的に教室をサポートし、クラスメート同士の仲を深めることができるような活動ができたらと考えている。